

## 母乳育児が困難な状況にある母親の心理状態と求める介入 : 退院後から生後6ヶ月までの状況より

著者	高塚 麻由
雑誌名	学長特別研究費研究報告書
巻	16
ページ	74-77
発行年	2005-06
その他のタイトル	Mind State of Mothers Having Difficulty in Breast-Feeding and Outside Active Support They Required : Case Investigation since Hospital Discharge till Month 6 Of Postpartum
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10631/715">http://hdl.handle.net/10631/715</a>

母乳育児が困難な状況にある母親の心理状況と求める介入  
- 退院後から生後 6 ヶ月までの状況より -

高塚 麻由  
新潟県立看護大学 (母子看護学)

Mind State of Mothers Having Difficulty in Breast-Feeding and  
Outside Active Support They Required  
: Case Investigation since Hospital Discharge till Month 6 of Postpartum

Mayu Takatsuka  
Maternal-Child Nursing , Niigata College of Nursing

キーワード : 母乳育児 (breast-feeding) 母親の心理 (mother's mind state)  
母乳育児支援 (support for breast-feeding)

#### 要旨

母乳育児を継続している母親が、退院後どのような状況から授乳困難に陥るか心理状況を含め明らかにするとともに、その時に求める介入は何かを明らかにすることを目的に、施設を退院後 6 ヶ月までの期間に授乳困難となった母親の調査を行った。

授乳に困難を生じ、退院後に助産師の介入を求めた母親に半構成的面接法による聞き取り調査を行い、質的に分析を行った。その結果、母親は母乳育児を選択するにあたり、「自然な営み」「授乳への憧れ」また「母乳の良さ」を【A. 動機】としていた。実際の授乳で母親は、「授乳の嬉しさ」など【B. 母親の実感】を感じる一方、授乳困難な状況としては入院中での「期待ハズレのケア (納得いかない授乳指導)」があった。また、入院中から退院後も「自然にできない」もどかしさや「子どもへの罪悪感」があり、自然にできると予期していた母親の期待と対立しあっていた。退院後、授乳困難な状況から助産師に介入を求める時期は退院直後が最も多く、この介入では、「信頼」「一対一でのつながり」のラポール形成を基礎とする、【D. 援助者との関係】が母乳育児継続にむけての重要な要因となっていた。

母乳育児に困難を生じた母親への介入は、援助者との関係が母親を授乳継続の方向に導き、母乳育児成功へつながるということが示唆された。

#### 目的

本研究の目的は、母乳育児を困難とする母親の心理状況とこれらの母親が求める介入について明らかにするものである。

#### 研究方法

##### 1. 調査対象

母乳育児困難を主訴とし助産師の介入を求め、調査の協力の得られた母親 15 名。

##### 2. 調査方法

平成 16 年 5 月から 3 月に、対象の母親に「妊娠中の母乳育児の捉え方」「出産後早期（入院時）の授乳状況および得られた援助内容とその心境」「退院後の授乳時に生じた授乳困難状況と求めた介入およびその時の心理状況」等について半構成的面接法による聞き取り調査を行い、承諾を得、録音した。

### 3. 倫理的配慮

研究協力は自由意志により、協力の諾否は助産師のケアに影響せずいつでも参加の取り消しができる、個人のプライバシーに関わる事柄は研究メンバー以外知らされない等、口頭と文書にて説明し、賛同の得られた対象者には同意書にサインを得た。

### 4. 分析方法

面接内容を逐語録にし、データは内容の意味づけとコード化を行い、コードの比較を継続的に行いながら意味ごとに分類し抽象度を高め、母乳育児継続過程において授乳困難を生じた母親の心理状況を説明するカテゴリーを抽出した。質的研究における研究者個人の能力や研究者の持つバイアスを避ける、またデータ収集・分析の信頼性を高めるために以下の手順で調査を行った。質的研究での研究者個人の能力やバイアスを避ける、またデータ収集・分析の信頼性を高めるために、①面接技術を高めるプレテスト、②対象者との複数回の面接、③対象者への確認と母性看護学領域の質的研究者、母乳育児援助の経験豊富な助産師からのスーパーバイズ、の手順で調査を行った。

## 結果および考察

対象は、初産婦 10 名、経産婦 5 名で、平均年齢は初産婦 30.0 歳、経産婦 30.5 歳であった。母親は、母乳不足感、直母困難、乳頭痛、乳汁うっ滞などにより助産師にケアを依頼しており、介入時期は退院直後が最も多かったが、実際には入院中からのトラブルであった。

表 1 対象者の概要

対象	年齢	初・経	トラブルの時期	トラブルの主訴
A	30才	初産婦	退院直後より	母乳不足感と直母困難
B	30才	初産婦	退院直後より	乳頭痛、母乳不足感と乳汁うっ滞
C	33才	初産婦	退院直後より	母乳不足感
D	31才	初産婦	退院直後より	母乳不足感と乳汁うっ滞
E	28才	初産婦	退院直後より	母乳不足感、児の要求が分からない
F	27才	経産婦	3ヶ月	乳腺炎
G	34才	経産婦	2ヶ月	母乳量不足
H	31才	初産婦	退院直後より	授乳方法
I	26才	初産婦	6ヶ月	児の吸てつ拒否
J	31才	初産婦	退院直後より	母乳分泌過多
K	38才	経産婦	退院直後より	授乳方法への不安(頻回授乳)
L	30才	経産婦	1ヶ月	直母困難
M	37才	初産婦	退院直後より	母乳不足と直母困難
N	23才	初産婦	退院直後より	母乳不足感と直母困難、児の啼泣
O	32才	経産婦	退院直後より	母乳分泌過多と直母困難

## 1. 母乳育児の動機と授乳に生じた困難

母乳育児は、「自然な営み」「授乳への憧れ」を期待するもの、経済的、母親の体重コントロール、児の免疫効果といった授乳による効果、利点からの「母乳のよさ」、母乳で育てるのが当たり前といった「世間の評価」が【A.動機】となっていた。実際の授乳で母親は、児の直接吸啜、出産による乳房の変化から嬉しさ、驚きを感じ、【B.母の実感】を体験した。しかし、授乳は母である実感をもたらさず一方、手におえない著しい乳房の変化やうまくゆかない授乳により、母親の期待した自然で、憧れる気持ちと対立しあった。ある母親は「生まれれば普通に飲んでくれるものと思っていたし、すごいそんな大変なものだとは思っていなかった。当たり前におっぱいがでて当たり前赤ちゃんが飲んでって思ったから。結構実際は辛いことが多かったから。すごいもつともつ普通に思った。普通に当たり前になっていくものだと思っていたけど」と、自然にできると期待していた授乳が期待通りにゆかなかったことへの苦悩をこのように語り、実際の授乳は【C.予期せぬ苦痛】を生じた。これらは母親をケアする者との関係からも生じており、母親は「期待ハズレのケア（納得いかない授乳指導）」「家族への期待ハズレ」という思いを生じていた。野口<sup>1)</sup>は母親の気持ちに添えていない助産師のケアの問題点を述べており、今回の結果も同様といえる。

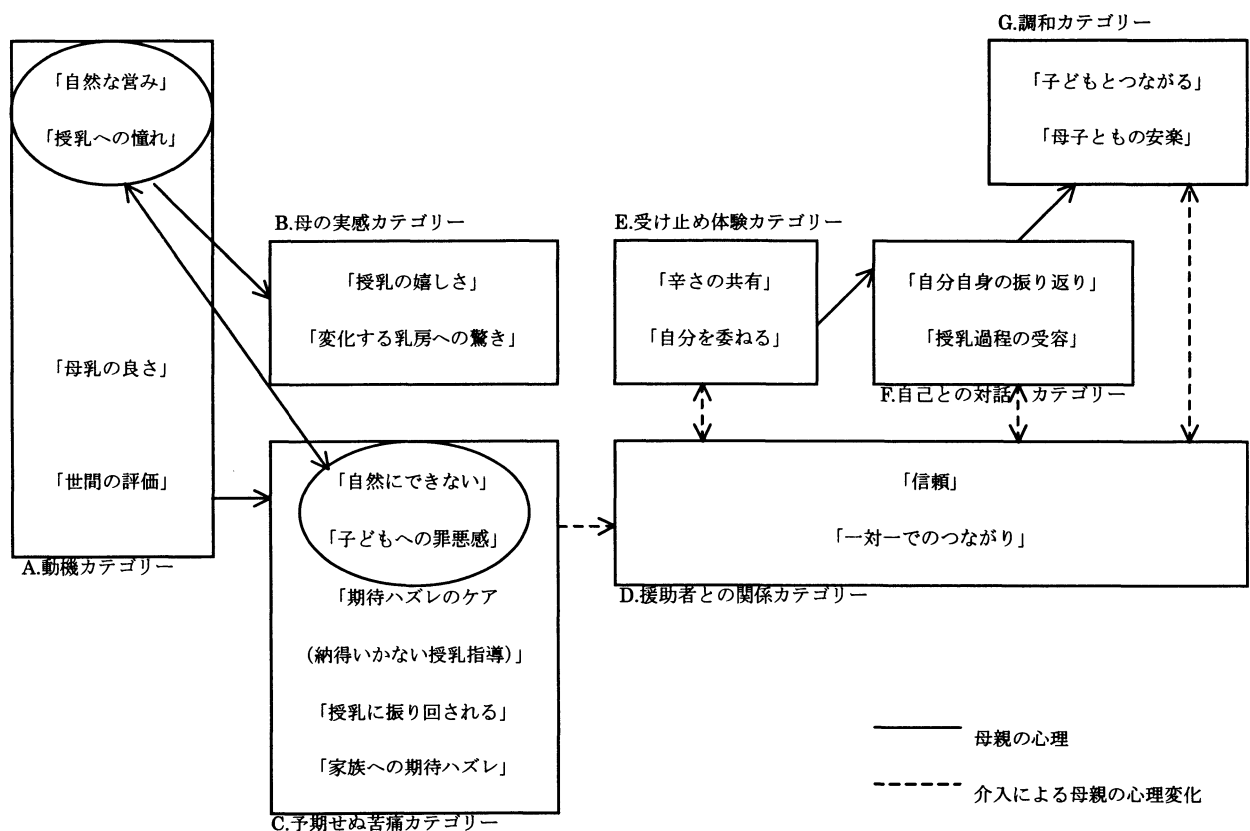


図1 結果の概念図

## 2. 助産師の介入による心理変化

母親は助産師の介入から、援助者への「信頼」「一対一でのつながり」を感じた。これは先に抱いた援助者への期待はずれな思いを修復させ、あらたな【D.援助者との関係】を形成した。母親はこの関係の中で、乳房トラブルなどの身体的な問題、児の吸啜がうまくゆかないなどの授乳技

術の解決を図りながら、心理的には「辛さの共有」「自分を委ねる」というこれまでの苦痛を助産師に受け止められる【E.受け止め体験】をした。これは【F.自己との対話】のきっかけとなり、「自分自身の振り返り」「授乳過程の受容」という母親の気持ちの変化をもたらした。母親は助産師との関係の中でこれらの過程をたどりながら、「子どもとつながる」「母子ともの安楽」という【G.調和】に至っていた。この調和に表されるものは、授乳経験前に母親が抱いた自然で懂れる母乳育児に近いものと思われるが、母親の実感としてのみ得られるこの気持ちは母乳育児を継続する上で重要なものと考えられる。

### 3. 母親の求める介入と課題

今回の結果から母乳育児が困難である母親への支援には、母親が援助者と一対一でつながり信頼関係を築くといったラポール形成が母乳を続けるために重要となることが示唆された。母親が妊娠中から出産後退院までに受けるケアは、外来と病棟担当者との非継続性や入院中も交代勤務の非継続性であり、母親は母乳育児に関して一貫した対応を受けることができず、退院後母乳育児をやってゆけるだけの知恵を獲得できない。レズリー・ページ<sup>2)</sup>も今回の結果と同様の視点で、援助者の一貫性のない指導は母親を混乱させると述べている。また母親の支えとなるはずの家族も、母親を傷つけ苛立たせることもある。母親が母乳育児を継続していくには家族の中にいる母親をとらえ、母親と家族が互いに調和をとれるような援助が必要ではないかと考える。清水ら<sup>3)</sup>は母乳確立要因に継続指導をあげているが、単に継続した指導ではなく、今回の結果から示唆されたように一人の援助者とつながることにより形成される信頼関係を基礎とした介入が重要と考える。

母乳育児は母子への利点が解明されるにつれ見直され、一部の母乳育児に取り組む施設はおおよそ母乳育児を継続しているが、全国平均の報告では横ばいであり、上越地域の母乳栄養率<sup>4)</sup>も、0～2月未満 54.5%、2～4月未満 42.6%と減少し、人工栄養はそれぞれ 5.7%から 26.0%と増加する。母乳育児の歴史を母子保健の主なる統計<sup>5)</sup>で見ると、1960年に1～2月 70.5%だった母乳栄養率が1970年には 31.7%と現在までの期間で最も低い割合を示しており、この世代に育てられている母親達は実母、義母の母乳育児経験のなさからくる言動へのズレを語っていた。このような母乳育児の歴史を踏まえ、世代間での伝達が母親の母乳育児への支援となっているのか、江幡<sup>6)</sup>も述べているが現在の母子が置かれている生活環境を理解した介入が必要となる。

今回の調査で母乳育児に困難を抱えた母親は、身体的なトラブルや授乳技術の未熟さを解決するだけでなく、心理的にも母親のこれまでの対処能力を超え心身の消耗をきたし母親になることをも脅かされる体験をしていた。しかし、母親は適切な援助によりこれらの困難を解消し子どもとつながるといふすばらしい体験を得ていた。今後さらに何が母乳育児支援となるのか、母親の体験に基づきながら明らかにしてゆきたい。

### 文献

- 1) 野口真弓. 母親の気持ちを支える母乳ケア. 日本助産学会 1999; 13(1): 13-21.
- 2) レズリー・ページ. 新助産学. 実践における科学と感性. 大阪: メディカ出版; 2002. 395-396.
- 3) 清水佳世, 鈴木清子, 糸賀三恵子. 生後3ヶ月までの児の母乳栄養率を調査して. 茨城県母性衛生学会誌 1999; (19): 36-38.
- 4) 新潟県上越地域振興局健康福祉環境部. 平成15年度健康福祉環境の現況-2003-. 2003. 85.
- 5) 財団法人母子衛生研究会. 母子保健の主なる統計. 2003. 127.
- 6) 江幡芳枝. 母乳育児を継続するために・ケアの変遷. 日本母子ケア研究会誌 2000; (1): 1-16.